

朝鮮王朝時代の国土地理思想における「水経」の位置づけ

轟 博 志

I. はじめに

朝鮮王朝時代の実学者による地理学の発展に関する研究は、主として地理学者そのものに焦点が当てられ、彼らの研究実績の地理的特性に焦点を当てた研究は多くなかった。それも、数ある地理的要素の累計のうち、白頭大幹に代表される国土の分水界ネットワークである「山経¹⁾」の研究と、道路体系に関する研究に集中しており、これらと並んで重要な要素であった、河川のネットワークである「水経」の詳細に関しては、ほとんど言及がなかった。

「山経」に関する認知は、山経の体系を図示した朝鮮時代の地誌である『山経表』が再評価された1990年代以降、学界と一般の双方で高まった。歴史学や地理学の分野では、楊普景²⁾や朴仁鎬³⁾らが先鞭をつけ、書誌の系譜や、そこに投影された国土自然地理認識についての論考が出された。伝統的な山に対する自然地理認識が、日本のように地質に重点を置いた「山脈、山地」の概念ではなく、風水の「気脈」が通る分水界に重点を置いた「山経」の概念であること、また国土全体のマクロ概念である「山経」と、地方単位のマクロ概念である「山緯」の二階層が存在すること、さらには分水界を表す「山経」と、分水界に区切られた流域を流れる河川体系である「水経」が表裏一体、すなわち陰と陽の関係にあるされていること等が明らかになった。その過程で、『山経表』等の異本が国内外で数多く収集され、その系譜的研究も進展した。

また道路体系に関しては、崔永俊⁴⁾が路線のマクロスケールの復原や機能分析の面で先鞭をつけ、轟博志⁵⁾はミクロスケールでの復原手法の確立と、道路体系の選定過程に込められた実学者の考え方について考察した。柳明垣は『道路考』や『四沿考』など、申景濬個人の著作の書誌的な研究を進め、それらが申の独自の調査ではなく、既存の地理誌の内容を全国規模に結合させたものと評した⁶⁾。現在でも「山経」ですら未だに具体的な分水界の経路の比定に至っていない段階なので、現状では道路に関する地理学的研究が最も進んでいると考えてよからう。しかし「水経」研究の方は、実学者丁若鏞の地理認識を分析するための楊普景⁷⁾による、『大東水経』に関する事例研究と、金基赫⁸⁾による『山水尋源記』の研究があるのみで、「水経」そのものの路線選定や、その地理思想面での特性に関する研究は、現在に至るまで皆無だ。

筆者は朝鮮王朝時代の地理誌の骨格として、頻繁に取り上げられる「山・水・道」の路線選定原理と、それに込められた実学者の地理思想を総体として検討してこそ、朝鮮王朝時代の国土地理観の全体像を把握できると考えている。そのため、本研究では今まで等閑視されてきた「水経」が、朝鮮王朝時代の実学者がどのような認識を持ち、どのような方法で地理誌に整理してきたのかを、「山」や「道」との比較を通じて検証しようとする。水経の体系化を試みた実学者には、旅庵申景濬と茶山丁若鏞がいるが、本稿では丁若鏞に先立って水経を考え、また唯一国土全体の水経の記述を完成させた申景濬(1712-1781)を事例として取り上げる。後述のように申が水経に関して詳説した文献に

は『山水考』と『東国文献備考』があるが、両者の間には路線や地名の選定などに若干差異がある。ただ本稿は差異を究明することを目的とはしないため、原本が伝わっている『東国文献備考』を底本と定め、分析を進めていくこととする。

Ⅱ. 申景濬と国土地理思想

1. 英祖代における実学と地理学

朝鮮の国土地理に関する著作が顕著に増加したのは、18世紀以降のことだ。それまでも『三国史記』地理条、『高麗史地理誌』、朝鮮王朝の『世宗実録地理誌』など、王朝ごとに史書に付随して地理誌が刊行されていた。また1481年には最も内容が詳細であり、現在に至るまで前近代⁹⁾の歴史地理研究の重要な基礎資料となっている『東国輿地勝覧』が刊行された。しかしこれらは文字通りの「地理誌(地誌)」であり、当時の地理思想を反映した記述にはなっていなかった。

地理誌と地理思想の結合は、18世紀初めに実学が活発化したことによって可能になった。実学は性理学を基礎とした現実的な社会経済改革思想のことで、王制の維持と社会発展の両立を企図した思想体系であり、実践体系である。その内容から、必然的に農学や経営学、政治学などとともに、地理学が重要な構成要素になった。地理学が重視されたのは、国土の基礎知識としての地誌という側面ももちろんあったが、王権や外交とかわった地政学的な側面も無視できないと、筆者は考えている。地政学的であるという点と、地誌としての内容の実用性が、当時の地理学研究が極めて実学的である所以と思うのである。以下に具体的に示したい。

地理学に実学の影響が本格的に入ってきたと考えられるのは、英祖王(在位1724-1776)の時代で、申景濬の存命時期と重なる。英祖の命により編纂された地理書としては、1765年の『輿地圖書』、1770年の『東国文献備考』中の「輿地考」¹⁰⁾があり、この他民間で刊行された地理書も数多い。『輿地圖書』の基本構成は『東国輿地勝覧』とほぼ同じであるが、『輿地圖書』の方には、郡県ごとの地誌の他に、全国的なマクロ規模の項目が多く追加されている。中には「歴代国界」、「関防」、「海防」などの項目があり、国境線の歴史の変遷や、辺境における防御施設の立地について、独立した項目で述べられている。これは明らかに国土の領域を内外に明示する目的を持っていると考えられ、地政学的な要因が作用していると思われる。

そもそも英祖が前年(1769)に国防を意識した地理誌の編纂を最初に着想したときの書名は『疆域志』であり、周辺国、つまり日本や清国に対して、朝鮮の領域(疆域)を明示する意図があったのは、書名からも明らかだ¹¹⁾。その後英祖の考えで総合的な地理誌とすることに編集方針が拡大され、『輿地便覧』に改名された¹²⁾。さらに地理以外の制度や儀軌なども含めた、中国の『文献通考』に範を取った総合百科事典化を企図して『東国文献備考』の企画がなされた¹³⁾。

かかる来歴から、地理的な内容は『東国文献備考』の骨格となった。全250巻のうち前段部分にあたる巻13から巻39までを「輿地考」が占めていることから、それがわかる。「輿地考」の編纂を任された実学者の申景濬は、編纂の準備作業として個人名義の地理書を次々に完成させた。その中には『疆域考』という、『東国文献備考』の着想当時の書名に似た本もあり、やはり歴代の国境を論じたものだ。同様に『四沿考』は朝鮮半島の海岸線と国境河川の経由地名を詳説したもので、これらはやはり国土の輪郭をはっきり示す目的を持っている。翻って『山水考』や『道路考』は輪郭

ではなく国内の地理的構造を、分水界・河川・道路のネットワークをもって表現したもので、そのネットワークに包摂された各地方都市が、王権の支配下にあることを示しているという点で、やはり地政学的な意図を持っているといえる。

2. 国土地理思想の基軸をなした「山経」「水経」「道里」

『山水考』や『道路考』の内容は若干の変更を経て、『東国文献備考』の「山川」条と「道里」条になった。前者はさらに「山経」「山緯」「水経」「水緯」に分かれている。「経」は縦糸、「緯」は横糸のことであるが、ここでは国土全体の山川体系を「経」、各郡県の体系を「緯」とし、タテヨコの対等の関係ではなく、マクロスケールとミクロスケールの関係になっている。『輿地図書』までの地理誌にも山川条や道路条が存在したが、それは各郡県の治所の所在地（邑治）を中心とした郡県内の体系に留まっており、つまり「緯」のみが記されていた¹⁴⁾。全国的ネットワークとしての「経」の概念は、『山水考』『道路考』、そして『東国文献備考』で初めて確立した。

例えば道路の場合、首都漢陽（ソウル）を起点として、『道路考』では6路線、『東国文献備考』では9路線の幹線道路（大路）が設定された。それらの終点は釜山や義州などの隣国との境界線、統営や忠清水営、西水羅など辺境の国防拠点、江華や済州、平海など海岸沿いの邑治などで、ほぼ国土の四辺に当たる場所だ。これはもちろん、実用面でも公務や外交、軍事的に幹線道路として機能していたのであるが、王権が及ぶ範囲の明示という目的も大きかった。一路線だけ内陸地方が目的地になっている大路がある。太白山路がそれであるが、正史である朝鮮王朝実録が保存されている「史庫」が立地する太白山覚華寺が終点であり、やはり王権と密接に関係した路線設定になっている。

大路の線形はマクロスケールで見ると直線であり、目的地までのなるべく最短経路をとっていることがわかる。そのために中間にある都市などを経由することも、それが迂回になる場合は最低限にとどめ、直線の線形を維持している。それらの都市には大路から短い支線を分岐させて、連絡させることで対応している。ちょうど都市の中心部を通らない高速道路と、インターチェンジを介して都市と連絡する一般道路との関係に似ている。大路の間を埋める数多くの支線があるが、それらも首都との間の最短経路を追求している点では同様である。結果として首都を中心に、全方面に向けて放射状に道路網が形成されている形になる。

一方で、地方都市間を結ぶ脊梁路線は『道路考』にも『東国文献備考』にも含まれていない。『山水考』の場合と違ってマクロスケールの「経」のみの収録であり、郡県単位の「緯」に該当する項目は設けられていない。実は後に『東国文献備考』から派生した『道里表』などの表形式の地理書には「道郡相距表」という名で、道の「緯」が記述されるので、申景濬が採用しなかっただけで、概念としては「山緯」「水緯」と同様存在しうる。

道路が首都を起点とした単一のネットワークである一方で、「山経」と「水経」はそうではない。分水界も河川も、首都を起源とはしないからだ。その代わり、それぞれ国土を12の「山経」と「水経」に分けて説明している。

3. 「山経」「水系」の体系と王権の時・空間的支配

各山経には宗山があり、『山水考』や『東国文献備考』には「山之為宗於域内者十二、一曰三角、二曰白頭、三曰圓山、四曰狼林、五曰豆流、六曰分水、七曰金剛、八曰五台、九曰太白、十曰俗離、十一曰長安、十二曰智異」とある。水経の場合も同様に「水之為宗於域内者亦十二、一曰漢江、二

日礼成、三日大津、四日錦江、五日沙湖、六日蟾江、七日洛東、八日大同、九日清川、十日龍興、十一日鴨緑、十二日豆満」となっている¹⁵⁾。水経は現実の水系単位・流域単位でまとまっているので理解しやすい。一方の山経は分水嶺であるので、本来は道路のように単一のネットワークに整理できるはずであるが、水経と対応する形で十二に分割されている。ただし、実際にそれぞれの宗山から伸びてゆく分水界が、必ずしも一つの水経に対応しているわけではなく、単に数字のみを合わせているものと考えられる。

十二宗山は各山経において、分水界の出発点になるのだが、分水界の分岐点付近で象徴となる山が選定されているため、必ずしも正確に分水界の出発点に位置する山とは限らない。そのため、隣接する山経どうしの間で経路の不必要な重複が起こる。因みに十二宗山のうち六番目の「分水嶺」だけは、山ではなく峠である。視覚的な象徴性を持つのは山であるが、峠はランドマークではないものの、道路との交点であり、人間の立場から山を認識する「窓口」の役割をなすため、山経の経由地名として多く採用されている。

十二宗山のうち二番目から十二番目までの十一宗山は、朝鮮半島を東西に、つまり日本海側と黄海側に分ける分水界上に、ほぼ位置する。ほぼ、というのは、上記のような理由で、若干分水界から逸脱している山を指定している場合があるからだ。この国土の背骨となる分水界のことを、白頭山から始まっているということから、白頭大幹と呼ぶ。しかし『山水考』や『東国文献備考』では白頭大幹の名は一切出てこず、白頭大幹を11の区間に分割し、北端の白頭山から、南に向かって順番に配列した形になっている。残る一宗山は三角山だ。三角山は現在の北漢山で、首都漢陽の祖山であることから、序列の最初に記載された。本文にも「山先以三角、水先以漢江、尊京都也」と、その意図が明記されている¹⁶⁾。

水経も同様に首都を流れる漢江を第一に据えている。そもそも漢江の北側（陽）にあるので、首都の固有名称も漢陽または漢城である。二番目以降の順番は、山経とは異なり必ずしも規則だっていない。二番目は漢江の北隣の礼成江が来るが、その次は漢江の南隣の大津であり、そこから七番目の洛東江までは反時計回りに進む。八番目はまた礼成江の北隣の大同江、九番目は清川江と時計回りに戻り、さらに十番目の龍興江から十二番目の鴨緑江までは再び反時計回りである。山経と異なり規則性があまり見出せない。考えられることは、礼成江が朝鮮王朝の前王朝である高麗の王都である開城（開京・松都）が含まれる流域という点だけだ。

山経の場合も、豆流山経の分岐線（礼成南臨津北正脈）¹⁷⁾の終点がやはり開城扶蘇岬であり、さらに長安山経の分岐線（錦南正脈）の終点は、百済の最後の都があった扶余の扶蘇山落花岩、智異山経（洛南正脈）の終点は金官伽耶の都である金海の盆山である。申景濬は明言していないが、これは山経を通じて空間（国土）の朝鮮王権による支配を明らかにすると同時に、時間（歴史）の支配をも表しているのではないかと、筆者は考える。ただし水経の場合は、礼成江以外は歴史上の王朝に配慮する順番とはなっていない。まして山経とは異なり、水経の主たる河川の発源地を首都に合わせて設定することもない。そのため、「時間軸」への支配は、あくまで国土地理体系の大きな骨格が崩れない範囲で表現されていたと考えられる。新羅の王都であった慶州などは、兄山江という旧慶州郡と迎日郡のみを流域とする小規模の河川と分水界に属しているので、山経と水経のどちらからも重要視されていない。

4. 基準点としての地方都市（邑治）

山、水、道路を通じて「空間の支配を表現している」と考えるもう一つの理由は、その路線や経由地の選定にある。結論を先に言うと、地方都市、すなわち邑治の立地を基準とした路線選定が行われているのだ。ここでいう「路線」とは道路のみならず、山経における分水界の路線、河川の流路など、広い意味での路線選択を表す。道路も分水界も河川も、膨大な経路のすべてを網羅できない以上、必然的に取捨選択が伴う。その取捨選択の基準は何なのか。

道路については前述のように、首都から放射状にすべての邑治を結ぶ路線を、申は選定している。幹線道路の路線を官庁ではない実学者個人が「選定」というのもおかしな話だが、朝鮮王朝時代において、公的文書に道路の路線を明示したものはない。当時の例規集ともいえるものには『経国大典』があり、実学全盛期において英祖もその改訂版として『統大典』を刊行している。そこに書かれている駅路管理の制度は「線」ではなく、駅という「点」と、地域別の駅の集合体である「駅道」という「面」のみで規定されている¹⁸⁾。各駅には駅吏が派遣され、駅道にはより上位の官僚である「察訪」または「駅丞」が派遣されて、駅または駅道単位で通信や人馬取次の業務が行われる。駅の分布も『延喜式』のように、各駅の比定地を結べば一本の駅路が炙り出されるわけではなく、各郡県に面的に散在している。また朝鮮の場合は、駅が必ずしも道路沿いに立地するわけではないので、駅の所在をもとに道路を比定するのは困難が伴う。

申景濬も『道路考』では道路体系を六大路、『東国文献備考』では九大路としている。金正浩の『大東地志』（1866）では十大路であり、張志淵の『大韓新地誌』（1907）では五大路など、編者によって多様である。そのため『東国文献備考』が官纂書であるから、その見解が正しいとは一概に正しいとは断定できない。ある程度の慣例はあったとしても、路線数や経路選定は、慣例を基礎とした実学者個人々の認識や考え方に依存していたと見るのが妥当だと考える。さらに言えば、全ての邑治と首都をつなげる道路のネットワークという考え方自体も、実学者の考えが反映されていると思われる。

山経はどうだろうか。申景俊が関わった『山水考』や『東国文献備考』、そして後代にそれを表化した『山経表』¹⁹⁾も、道路と同様に全ての邑治へ向かう分水界が網羅されている。邑治を重視していることは、分水界の経由地名からもわかる。山経は実体としてはあくまで分水界なので、経由地名は山や峰、峠が連続する。そしてほとんどの分水界が邑治で終点になるのだが、地名は邑治名そのものではなく、その主山の名前が充てられる。例えば「飛鳳山南有安城郡治」のようにだ。主山とは風水地理説の概念で、宗祖である白頭山から龍脈（分水界）を通じて運ばれてきた気が、主山の南側の麓（穴）から噴出し、吉地を規定する重要な山である。山経は国土の自然地理的な骨格をなすと同時に、風水地理説という地理思想上の骨格でもある。朝鮮にある全ての邑治は等しく白頭山の気を受けている共通点があることを、『山水考』は明示しているのだ。そのため、山経も自然地形以上に、邑治の立地を基準として分水界が選定される。

それがはっきりわかるのは、一部の邑治では主山の名称がわからなかったために、本来主山の名称が入るところに、邑治名そのものが代入されているケースがあるためだ。例えば慶尚道陝川邑の場合、「南迤陝川治」とだけ書かれ、主山名は触れられていない。『東国文献備考』の山経部分を表にした『山経表』は、全ての主山に対して「乾興山、居昌治在南八里（後半は割注）」²⁰⁾のように、邑治と主山の位置関係を示している。これは『東国文献備考』の「山経」条には書かれていない情報なので、「山緯」条からの引用なのであろう。『山経表』でも陝川は主山名の代わりに「陝川治、山

名未詳」と書かれている。同様の例は平安道陽徳邑、同熙川邑、宣川邑、龍川邑、京畿道豊徳邑、江原道高城邑、同杆城邑、忠清道清安邑、慶尚道漆原邑、全羅道茂長邑など、全国に十か所の事例がある。邑治の他にも、釜山鎮、木浦鎮、法聖鎮など辺境の軍事施設名や、咸鏡道永豊古県などの廢邑、果ては日本幕府（対馬藩）の外交施設である、東萊の草梁倭館まで、様々な施設へと延びている。

恐らく申景濬は、山経を設定するにあたって、まず各邑治などの主山の位置を比定し、そこから白頭山方面に分水界を遡る方法を取ったのではないか。そして直ちに山名がわからない主山に関しては、暫定的に邑治名で代入し、最後まで明らかにならなかったものや、主山名の挿入を失念した上記の地名たちが、そのまま残って刊行され、さらに『山経表』を作成する過程でもそのまま引き写されてしまったのであろう。実際には『東国輿地勝覽』など、先行する地理誌の各郡県条には主山名が掲載されているのだが、なぜ最初に申景濬がそれらを参照しなかったのかは不明だ。いずれにせよ、分水界という自然地理的な体系のはずの山経が、邑治などの人文地理的な要素を基準として選定されるという事実は、注目しておく必要がある。一部の『山経表』、例えば『箕封方域考』所収の『山経表』では、上部欄外に、邑治名の索引が付記されている。これを見ても、『山経表』の利用者が邑治と山経の関係をすることを目的としていることがわかる。

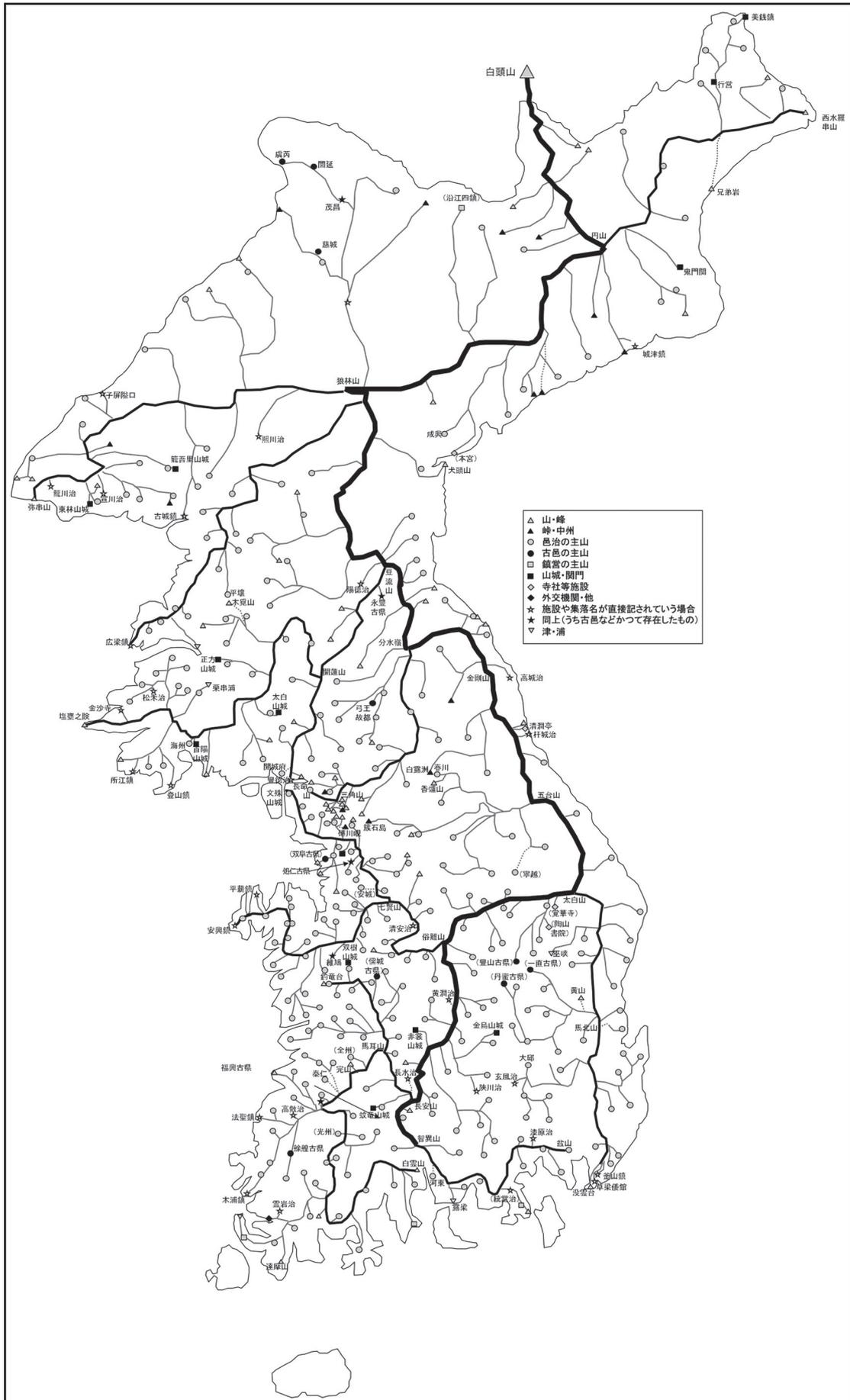
5. 漢陽と白頭山、二つの王権の象徴が惹起する空間的矛盾

このように、自然地理的にも風水地理説としても、白頭山を始点とし、白頭大幹を幹線とした分水界のネットワークは、国土地理を説明するうえで合理性を持っていた。一方で、三角山を十二山経の筆頭に据えることは、かかる空間的秩序と矛盾しており、白頭大幹の存在をも否定してしまう。そのためか、『山水考』や『東国文献備考』では白頭大幹には一切触れられていない。白頭山を民族・国土の宗祖とする思想自体は英祖代以前から存在し、『輿地図書』の各郡県条にも、山嶺が白頭山から来脈することを示唆する内容がある。にもかかわらず白頭山ではなく三角山を筆頭に置いたのは、「京を尊ぶ」と同時に、白頭山の上に京が君臨することで、王権が白頭大幹を通じて国土を掌握することを象徴していたのではないか。山経を十二宗山に分割したのもそのためである可能性もあろうし、白頭山を第二の序列に据えて、さらに第三以降の宗山を白頭大幹の順に配列したことは、白頭大幹の概念が既に浸透していることに配慮したのかもしれない。国土のかたちを示すことを目的とした王命による地理誌であることを考えれば、そのような編集方針は十分うなずける。

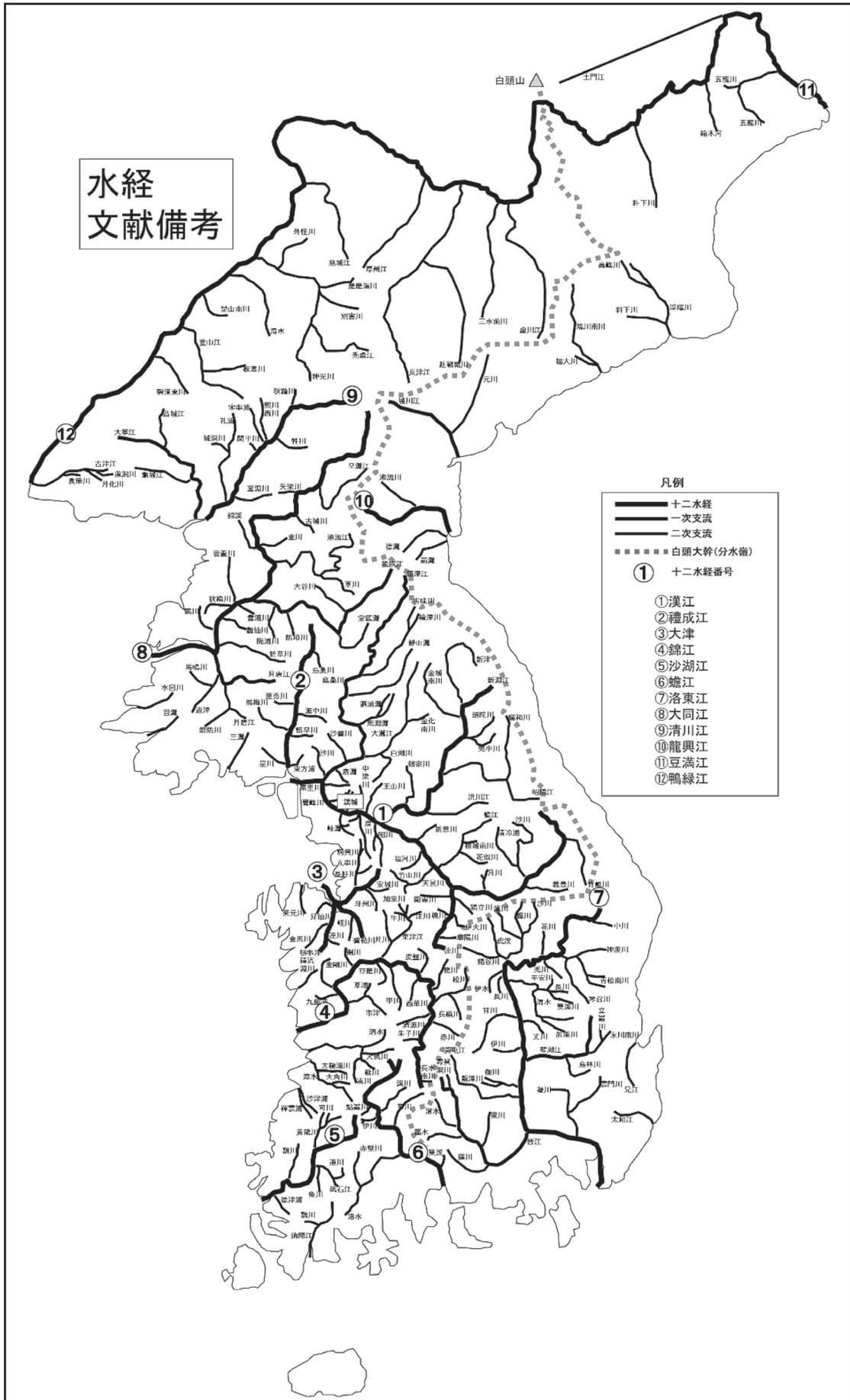
ただこれらの地理誌をもとに、主に民間で作表された『山経表』では、逆に白頭大幹が中心に据えられている。各水経を区分する幹線山経は一つの正幹と十一の正脈として、白頭大幹の支線として描かれる形になった。代わりに三角山は正脈の一つである「漢北正脈」の、一通過地点という扱いになり、首都漢陽は三角山から分岐する岐脈うち一つの終点である白岳が主山（三角山は漢陽の祖山²¹⁾）という扱いになっている。『山経表』や『道里表』は申景濬の著作と基礎として、公務旅行や風水の相地などのための、携帯用の一覧表として作られた実用的な地理書であり、数多くの写本や異本が伝わった。道路の場合は実際の道路体系も首都中心になっているので、実用優先の地理書であっても大きな構成の変更はなく、ただ地方都市間の脊梁路線をカバーするための「緯」として、「道郡相距表」を追加するだけで充分であった。しかし『山経表』の場合、実用を優先するためには、王都中心の表体系にするのは無理があったのだ。

むしろ、白頭山を「国山」として国家アイデンティティの象徴とみなす思想を形成させ、白頭山を王権と重ね合わせようとしたのではないか。崔元碩は白頭山における国家祭祀が他の宗山より大

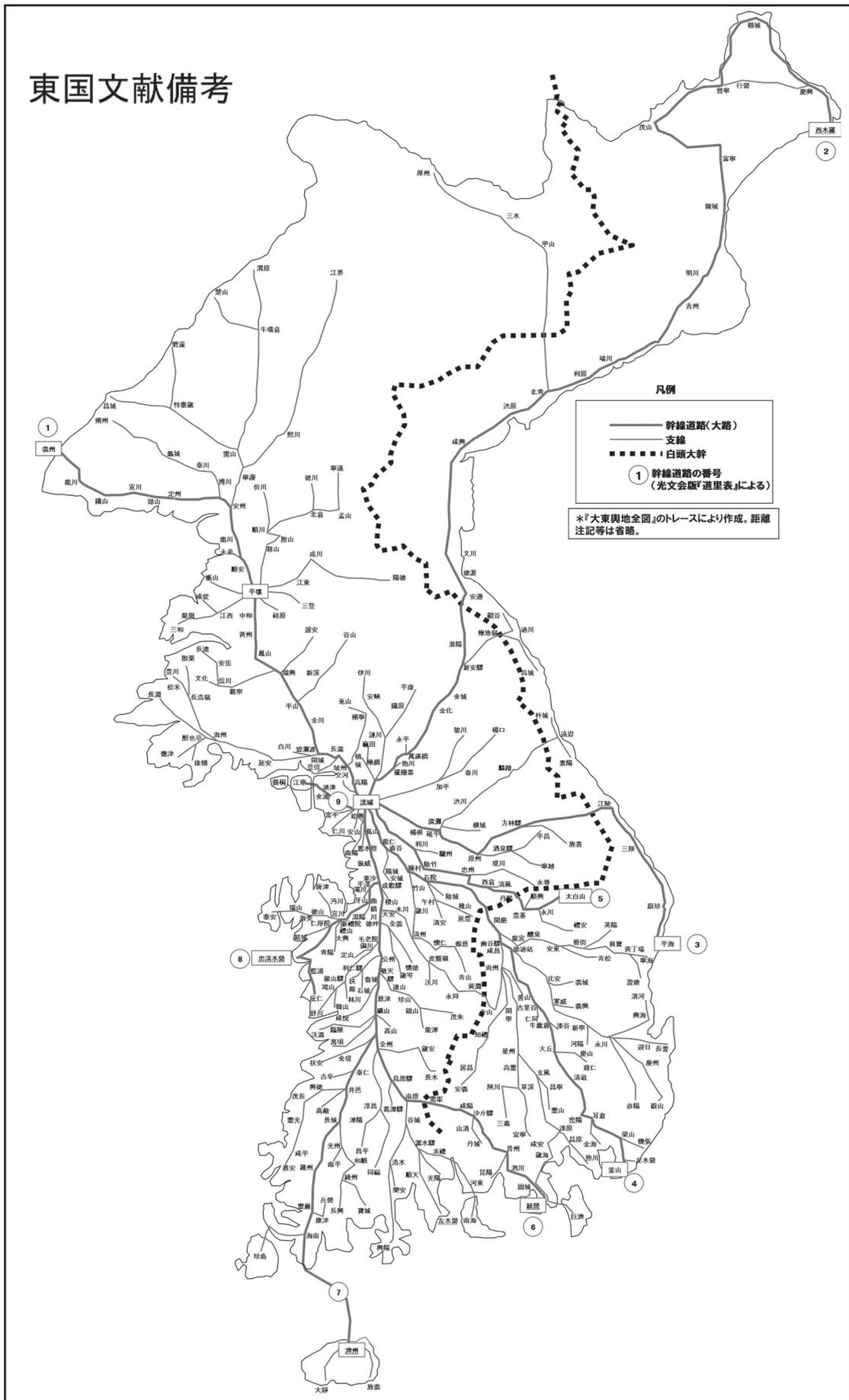
幅に遅い英祖四十四年（1768）に始まったことを指摘し、この時期に白頭山祖宗論と白頭山来脈説が国論として公式化したと指摘した²²⁾。こうした「国山」意識は1711年に清国が白頭山の南方に「定界碑」を建植したことを契機に活発化した²³⁾。定界碑の存在は、約60年後の『東国文献備考』の作成にも、間接的な契機を提供したであろうし、英祖王が国土地理に強い関心をもつ理由の一つであったろう。実学の隆盛や、実学の中での地理学の重要性にも影響を与えたと思われる。豆満江水経の支流として記載されている土門江は、定界碑や豆満江の中国側（左岸）を流れる川であるが、白頭山頂上のカルデラ湖である大澤（天池）に源を発し、地中を伏流して流れると記されている。²⁴⁾「豆満江以北の領土を清国に奪われた」事実を暗に主張しているのだ。漢陽は国土の現実上の中心だとすれば、白頭山は国土の思想上の中心であった。



第1図 『東国文献備考』に現れる山経と邑治の関係



第2図『東国文献備考』に現れる十二水經



第3図 『東国文献備考』に現れる道路体系

Ⅲ. 「水経」の必要性と特性

1. 水経と邑治

水経の場合にはどうか。漢江や洛東江といった各水経の基幹となる河川に関しては、すでに河川名として定着していたことと、源流を奥地の著名な山に求める場合が多いため、必ずしも邑治の立地を念頭に置いた経路選定にはなっていない。例えば、漢江の源は五台山、金剛山、俗離山の三か所、洛東江の源は太白山、豆満江と鴨緑江は太白山を源としている。これらはそれぞれ山経の十二宗山を源流に選んでいる。他の河川も十二宗山ではないものの、山経に記された山や峠を起点としているので、「河川は山から発する」という認識を反映していたものと思われる。

一方、山経の場合、圓山山経（『山経表』の長白正幹）は造山、狼林山経の清北正脈は弥申山、同清南正脈は広梁、豆流山経（海西正脈）は醜甕之險、太白山経（洛東正脈）は没雲台、俗離山経（錦北正脈）は安興鎮、長安山経（湖南正脈）は白雲山と、海に入り込むところで終点となる。もちろん前述のように、各王朝の王都を終点とする場合は別であるが、「分水界は海に没する」認識の反映と考えられる。このことから、山経と水経はお互いが発生の源であり、終焉の淵であるという、陰と陽の関係であることがわかる。同時に、起点と終点以外では、両者は決して交わることがない。こうした、白頭大幹から分かれる幹線の役割をする分水界を「正脈²⁵⁾」というが、正脈の役割は主に十二水経間の分水界の役をなすことと、各邑治を連絡する支線²⁶⁾を分岐させることだ。ちょうど道路において、直線の幹線大路から各邑治に分岐する支線道路の関係と相似する。幹線大路がそうであったように、正脈が直接連絡する邑治はそう多くない（白頭大幹のように全くないわけではない）。果樹が幹には実がならず、枝に実がなるのに似ている。

水経の場合、そもそも内陸では河川に沿って都市が発達する場合が多いので、山経や道路に比べて、本流に接する邑治は多い。特に錦江の扶余や公州、大同江の平壤、沙湖江（榮山江）の羅州、漢江の忠州など、古代都市由来の邑治がそうである場合が多い。これは三国時代の都や統一新羅の九州五小京などの古代由来の都市が、交通や経済活動に有利で、かつ面的な広がりを持つ都市計画が可能な河川沿いの平地に立地する傾向があったからだ。一方、高麗時代以降に立地したり移転した邑治の場合は、風水地理説に依拠して、主山を中心に三方を山に囲まれ（玄武・青龍・白虎）、前方に水を湛えた「背山臨水」の形局を持った場所に好んで立地した。従って、大河川沿いよりも支流の谷筋が好立地となる。『山水考』や『東国文献備考』では、数多い支流のうち、たとえ小規模な河川であっても、邑治を通過するものを選んで掲載し、結果として各水経の流域内に立地する邑治さえあれば、水経を通じてほぼ網羅した。

逆に海岸沿いの邑治は、たとえ古代由来の大邑であっても、かなりの確率で省略されている。特に江原道の場合、北端の歙谷から南端の平海まで、一切載っていない。その中には襄陽など都護府級の邑治もあり、江陵に至っては新羅九州の溟州以来の伝統を持ち、道名の由来にもなっているにも関わらず、である。同じく道名の由来である大邑の慶尚道慶州（兄山江）、咸鏡道咸興（城川江）は収録されており、一方黄海道海州や咸鏡道鏡城は省略されており、原則が何であるかはっきりしない。強いて言えば、慶州は新羅の王都であったこと、咸興は朝鮮王朝の李氏一族に所縁があるからかもしれない。

海岸沿いには十二水系に属さずに、直接海に注ぐ小河川が数多くあり、そこにも邑治が多く存在するが、それらを収録しているのは、上記を含め黄海道で三水系、忠清道で一水系、全羅道で四水

系、慶尚道で二水系、咸鏡道で三水系のみだ。結果として十二山経では全ての邑治を網羅し、十二水経では海岸沿いで多くの欠落が発生している。これは自然地理としての水経の構造の限界なので、致し方ないであろう。しかし、大津水経や龍興江水経などでは、本来海に属する湾の部分を河川の延長とみなし、そこに流入する河川をまとめて一つの水経に整理するなど、できる限りの邑治をカバーしようという努力の痕跡は見える。いずれにせよ、邑治という人文的地点を基準としようとする方向性には変わりがないだろう。

河川が邑治付近を通過するときは「環長城府治」「至和順県東」「経井邑県」など、具体的に邑治と川との位置関係を示している。また、支流からさらに小さな支流上に位置している邑治の場合は、「過松禾前川」のように「邑治の前方を通過する川（との合流点）を通過する」という書き方をしている。この場合は得てして川の固有名詞を書かず、独立した河川の項目も立てず、「過〇〇（邑治名）前川」で済ませている。これは記述が煩雑さを避けるためであろう。同時に、前述の山経において主山の名が知れない場合に、邑治の名称を代入したことも、同じ発想と考えられる。

つまり最初に邑治の存在ありきで、それに見合う山と川を、名前が知れているか否かを問わず配置し、それらを山経と水経に接続していく方法を取ったのだ。風水が「背山臨水」であるのは、山が土地に地気を供給・貯蔵し（藏風）、川が水口を通じて邪気を排出する（得水）ことによる。各邑治においても山と川が陰陽の対をなして、初めて吉地となる。そこで申景濬は邑治の主山と水口に接続する形で、山経と水経の体系を説明したのであろう。山経のみならず水経も、純粹に自然地理的な河川水系としてではなく、邑治を中心とした風水の体系という、人文地理的な発想から体系化されているのだ。

2. 邑治以外の人文地理的経由地点

邑治以外の集落や施設の場合はどうか。まず山経と同様に、古県が存在が目立つ。水経の経由地名に多く出てくる「古県」とは、「輿地考」の編纂時点で廃止された県の所在地、すなわち旧邑を指す。県は「府・牧・郡・県」とある、朝鮮八道に付随している基礎行政区域の一種だ。ただ廢四郡²⁷⁾以外に、朝鮮王朝時代に廃止されたのは全て「県」である。経由地名として、合わせて40件が記録されており、すべてではないが、当時の古県をほぼ網羅していると言ってもよい。前述のように内陸の邑治をほぼ全て網羅した形で、掲載河川の取捨選択が行われているが、古県に対しても同様の方針がとられている。

例えば大津水経の業元川は、経由する邑治はなく、旧邑である余美古県のみを経由する。これは明らかに余美古県が存在を念頭に置いた河川の選択である。同様の事例は、大津水経の弥勒川（豊歳古県）、錦江水経の銅川（維鳩古県、新豊古県）、蟾江水経の福興古県、洛東水経の禿川（一直古県）、缶溪川（缶溪古県）、龍潭川（冶炉古県）、琴召川（安徳古県）、鴨緑江水経の慈城江（慈城古県）など、全国に分布している。これは実は山経にはない特徴で、山経では古邑を通るためにわざわざ岐脈を分岐させることは、一般的ではない。

数は多くないが、邑治や古邑以外の集落が経由地名として挙げられる場合もある。鴨緑江水経や豆満江水経、龍興江水経では、泥穀社、白初社、元平社、薪山社、長坪社、水洞社などがこれにあたる。そのうち、龍興江水系箭灘の薪山社、城山江支流の元川の元平社は、他に邑治や古邑がないのに、水経に収録されている。「社」は朝鮮では北部咸鏡道独特の行政区画名称で、他の地域では自然集落に付される「里」に該当する。人口密度が希薄な咸鏡道では、南部の平野地帯とは異なり、こ

うした小規模集落でも地誌や古地図に頻繁に登場するほど、邑治に匹敵するほどの地域中心地たり得た。茂山郡延社などは、現在の北朝鮮では「延社郡」として独立した郡になっているほどだ。したがって水経の経由地名となり、時には水経選択の基準になったのであろう。

府牧郡県に準ずるが、小規模で独立した邑とみなされなかった行政区画として、新羅時代から朝鮮王朝初期まで、郷・所・部曲があった。ごく少数であるが、これらも水経に収録されている。このうち「所」とは、特定技能集団が居住する地域を指す。鉄所や紙所、磁器所など技能の内容や特産品を示した地名もあるが、単に一般地名を使用する場合もある。洛東江水経では、全羅道雲峰から発源する瀧川に、馬川所という経由地名がある。智異山北麓の険しい谷筋にあるが、智異山から北上する谷と雲峰から南下する谷の合流点にあり、朝鮮王朝時代には面となり、六齋市も立っていた交易拠点だ。現在も咸陽郡馬川面役場の所在地になっている。

郷も所と位置づけは同じだが、特定産品に依存するのではなく、一般の農山村である。どちらも忠清道であるが、大津水経の弥勒川には徳坪郷があり、錦江本流には周岸郷がある。前者は幹線駅路である三南大路から、全義邑・燕岐邑・懷徳方面への支線が分岐する交通の要所で、酒幕村もあった。後者も別江津という錦江上の渡し場を控え、やはり六齋市があった。両者とも郷所部曲が消滅した朝鮮王朝時代には清州の飛び地となったことも、元はそれぞれ一つの郷であったことをうかがわせる。

表 『東国文献備考』輿地考山川条水経の項に表れた経由地名の類型

	①漢江	②禮成江	③大津	④錦江	⑤沙湖江	⑥蟾江	⑦洛東江	⑧大同江	⑨清川江	⑩龍興江	⑪鴨綠江	⑫豆滿江	計
山	48	13	15	23	8	27	60	29	6	5	7	16	257
峠	34	1	3	6	2	7	8	9	16	1	15	6	108
その他自然	30	7	4	10	6	9	30	31	11	3	9	9	159
川	122	25	23	54	23	41	130	65	31	7	34	24	579
邑治等	25	8	17	26	11	13	51	23	9	2	59	27	271
その他人文	52	9	8	20	5	19	42	25	12	9	29	18	248
渡し・橋	46	1	10	33	2	9	45	19	5	1	1	2	174
浦	12		11	11	6	10	4	11	2	6	1	3	77
他・不明	7	1	3	6	0	0	3	1	2	0	3	0	26
計	376	65	94	189	63	135	373	213	94	34	158	105	1899

3. 自然地理的な経由地点

山経の場合は、一部の例外を除いて経由地名は山や峠などの自然に関連した地名であり、邑治などの人文的地名は、「山や峠に隣接するもの」として説明されている。しかし水経の場合は、山や嶺の連続である山経と異なり、河川は線的な存在であるので、河川に関連した自然のみで経由地を表すのは限界がある。必然的に沿岸の人文的地名を借用せざるを得ない。表は『東国文献備考』に掲載された十二水経の経由地名を分類したものだ。集計方法によって誤差がありうるが、全部で1899の地名が検出された。

このうち純粋に自然地理由来の地名は836件であった。その中でも河川そのものに由来するものは579件だ。日本でもそうであるが、千曲川と信濃川のように、同じ河川でも通過する地域によって名称に変化がでることがある。水経においても同一河川における河川名の変化は多く収録されているが、経由地名の不足を補う側面もあると思われる。例えば大同江の場合、上流から黒淵江・凝江・三月江・静戎江・義波河・神職川・西江・大同江・観仙江と変化する。この中には特定の地点のみに使われている名称もあれば、規模の大きな支流に合流する手前まで長く続く名称もある。水

経名にもなっている大同江は、もともとは平壤府周辺で使われた名称だ。言うまでもなく平壤は高句麗後期の王都であり、朝鮮王朝においても平安道の監営（道庁）所在地だった。平壤城自体が大同江の右岸（陽）に臨じているが、内城の川辺に開いた城門を大同門と呼び、そこから対岸の船橋里へ渡る渡し場を大同門渡（韓国語でナル）と呼んだ。この渡しは他ならぬ一大路（義州大路）の経路になっている。

このほか錦江の語源になっている公州の熊津²⁸⁾の渡しは、錦江と六大路（三南大路）の交差点であり、尚州の洛東津は洛東江と四大路（嶺南大路）の、坡州の臨津渡は漢江水経の臨津江と一大路の、義州の鴨緑渡は鴨緑江と一大路の、それぞれ交差点だ。名称からして渡しの名前が河川名になったと考えられるが、前述のように区間別に一筋の河川でも様々な名称がある中で、幹線道路との交差点が河川を代表する名称になっている場合が多いのは、この交差点が国土地理上重要な意味を占めているためといえる。

「川」以外では、淵、灘、水、湖、溪、潭、波などの、河川にまつわる名称が多く使われている。また水関係以外の自然要素では、山が257件ある。水経の説明であるにもかかわらず意外に思えるが、前述のようにほぼすべての河川と支流が山に源を発しているとされているためだ。少なくとも記載されている河川数程度は山が登場する計算であるし、例えば蟾江²⁹⁾の始まりは「蟾江源出鎮安之馬耳中臺、及全州之熊峙、合而西南流」³⁰⁾とあるように、源流が2、3か所に分かれている河川も少なくない。さらに、河川の流路上に視界に入る山岳や岬も、多く収録され、一部は「内蔵山之東」のように、河川と山の位置関係を示してくれる。山の他には、崖³¹⁾、島、洲、峽、臺、遷、壁、屏、原、坪などがみられる。

一方、完全に人文的な要素としては、先述の邑治や古県が271件、その他の人文要素が248件と、両者を合わせて519件になる。全体の27.3%で、無視できる数字ではない。「その他」の中には、鎮や堡などの軍事施設や経済施設としての倉、交通施設としての駅・院・站、一般集落としての里・洞・村、宗教・文化施設として寺・庵・亭など、多様である。朝鮮の河川は可航区間が長く、水運が盛んであったので、河川からの視点で、人文的な目標物を記載したのかもしれない。

4. 自然と人文の有機的結節

河川は自然であると同時に、水路と捉えると人文的要素でもある。そのため交通の拠点である地点は、人文と自然の双方にカウントする必要がある。そう考えられる地点が、合わせて359か所ある。そのうち道路との交差点である渡しや橋梁が174か所と、半分弱を占める。『東国文献備考』に収録されている道路と河川の交差点は、ほぼ網羅されていると考えてよいだろう。大路の場合は、渡しの名称が付近の河川の名称となり、さらに河川の代表名になることは、先に洛東江、錦江、大同江、鴨緑江等の事例を示した。なお、渡しは「津」や「渡」などの漢字で記されている。

「浦」は「浦口」であり、河港を意味する。渡しが川と道路の交差点だとすると、浦は河川水運と陸をつなぐ結節点であり、水経を交通路として捉えた例だ。77か所が記録されている。もちろん漢陽の麻浦のように、渡しと河港を兼ねている場合もある。交通路との交差という点では、岬も人文と自然の両方にかかっているといえる。水経の経由地名としての岬は、全部で108か所あるが、山経でも、例えば白頭大幹の経由地名のほぼ半数が岬である。渡しと同様に、大路と大幹や正脈が交差する岬は、全てではないがかなりの地点が収録されている。

5. 実学思想と国土地理

ここまで見ると、申景濬が国土の構成要素として、山経・水経・道路を選択してきた理由が見えてくる。もちろん前述のように風水の構成要素であることと、王権の支配領域を示すという目的があったことは明らかだ。しかしそうした観念的な目的や、政治的な目的だけではなく、実用的な目的を兼ね備えるのが実学だ。山経と水経はその自然地理的・風水地理的特性から、始点と終点を除いて並行して交わらない、陰と陽の関係であることも、既に述べた。一方の道路は、峠や渡しを通じて、山経や水経と何度となく交差する。そしてその交点は河川の代表名となるほどのランドマーク性を持っていた。

日本統治期の話ではあるが、車嶺山脈や蘆嶺山脈など、大路と山脈の交差点にある峠の名が山脈名になる事例も、同じ脈略で捉えられるし、朝鮮王朝時代の郡県地図にも、しばしば「竹嶺大路」のように、通称として、道路名に峠の名前を入れることで、経路を特定する事例がみられる。これらのことは、山経・水経・道路といった「軸」の交点を特定することで、国土の空間座標を把握する仕組みになっていたのではないか。これにより、地理誌を持っていけば、国内の移動はスムーズになり、『山経表』や『道里表』の実用性が飛躍的に増すことになる。申景濬がそこまで意図していたかはわからないが、結果として、国民が国土をイメージしやすくする効果をもたらしたといえよう。

IV. おわりに

本稿では、朝鮮王朝時代における実学の発展とともに、確立された固有の国土地理認識において、河川がどのように位置づけられ、どのような役割を負っていたのかを、河川以外の要素を比較しながら検討した。英祖王の時代に、申景濬という優れた地理学者を擁して構築された国土地理体系の主たる要素は山と川、そして道路であった。これは人間世界が、天上の星辰（天文）と、それに相対する「山川道里（地理）」に囲まれて成り立っているという、東洋古来からの「天覆地載」の思想に依拠していると思われる³²⁾。つまり申景濬以前に、地理の要諦は「山川道里」であるという思想は定着しており、『山水考』や『道路考』はその具体化、『山経表』や『道里表』はその現実社会への還元と捉えられる。

山は自然地理であり、道路は人文地理であり、河川はその両方の性格を持っている。これらの要素が三位一体になって、平行または交差することによって、国土の座標軸を編み出し、また各地方都市の位相を明確にする。そのことによって得られるものは、王権の及ぶ範囲を明確にするという地政学的な側面、風水地理説を媒介に自然と人文を結合する思想的な側面、そして現実の旅行や択地に役立つという実用的な側面である。自然と人文の融合と、思想と実践の融合は、とりもなおさず朝鮮実学の特色でもある。申景濬による国土地理体系の確立は、朝鮮実学の代表作と言ってよいであろう。

実用への活用という点で言うならば、『山経表』『道里表』を通じて広く普及した山経と道路に対して、水経は後塵を拝していたと思われる。『水経表』に相当するものが、少なくとも現在に一切伝わっていない事実が、それを端的に物語る。申景濬の段階では、水経は山経と同等に扱われていたので、地政学上や地理思想上の重要性という点では劣らなかったと考えられる。一方実用面で言うと、陸上の移動に利用できる『道里表』や、風水択地等に使える『山経表』に比べ、水経の実用性

が必ずしも十分ではなかったのではなかろうか。また「国土の座標を認識する」点でも、最低限山経と道里があれば十分という認識だったのであろう。一部の地理誌で、『山経表』と『道里表』が一巻にまとめられて地理誌の表題がつけられたり、両者で上下巻（乾巻・坤巻）を構成したりするのは、その表れと考えられる。

実際に『水経表』が作成されていたら、どのような内容になったのか。当時に実学者になりかわって作成を試みることは、未完の伝統学問を完成させるとともに、当時の国土地理認識を、当時の視点でより深く考察する契機になると思われるので、後続の課題としたい。

〔付記〕本稿は、科学研究費助成事業・基盤研究（C）「朝鮮時代の国土地理認識における水経の基礎的研究」（研究代表者：轟博志、研究期間：2019～2021年度 課題番号：19K01196）の助成金を活用した研究の一部である。本研究の骨子は、日本地理学会 2020 年度秋季大会（オンライン開催）においてポスター発表を行った。

注

キーワード：実学、申景濬、水経、国土地理思想、地政学

Keywords : *Silhak* thought, Sin Gyeongjun, water system, nationwide imaginative geography, geopolitics.

- 1) 山経とは後述するように、国土におけるマクロな分水界の体系のことを指し、地質学用語である山脈とは区別される。本稿では分水界単体や集合体、またそれを見つめる地理思想の双方について「山経」の語を用いる。河川のネットワークである「水経」も同様。
- 2) 楊普景「申景濬の山水考と山経表—国土の山川に対する体系的理解」、土地研究 3（韓国）、133-145 頁。
- 3) 朴仁鎬『朝鮮後期歴史地理学研究』、以会文化社（韓国）、300 頁。
- 4) 崔永俊『嶺南大路—韓国古道路の歴史地理的研究—』、高麗大学校民族文化研究所（韓国）、1990、471 頁。
- 5) 轟博志『朝鮮王朝の街道—韓国近世陸上交通路の歴史地理—』、古今書院、2013、240 頁。
- 6) 柳明桓『旅庵申景濬と訳注道路考』、図書出版歴史文化（韓国）、2014、500 頁。
- 7) 楊普景「丁若鏞の地理認識：『大東水経』を中心に」、精神文化研究 67（韓国）、1997、99-116 頁。
- 8) 林晶妍、金基赫「丁若鏞の北漢江河川体系認識研究：汕水尋源記を中心に」、文化歴史地理 64（韓国）、2017、40-57 頁。
- 9) 朝鮮における近代と前近代をどの時点で区分するかは諸説があり、基準を何にするかによっても異ってくる。地理認識という点では、日本の影響力が増して地形図の測量等が始まる大韓帝国期以降を近代とすることが合理的と考える。
- 10) 「輿地考」は『東国文献備考』の一項目であるので、以降は『東国文献備考』に呼称を統一する。
- 11) 朴仁鎬、前掲 3)、28-29 頁。
- 12) 『備辺司謄録』百五十三冊、英祖四十五年（1769）十二月二十四日条「傳曰、頃者以疆域志下教、今覺其名、近於野名、曰輿地便覽、此非張大者、令句管備局堂郎、照管紙筆墨、書寫許給郎廳、申景濬臺職許遞、復差備郎（後略）」。
- 13) 『英祖実録』七十六冊卷百十三、英祖四十五年十二月二十四日。「命刊東國文獻備考。其書凡例、悉倣文獻通考、而只蒐輯我朝事。選文學之臣、以領之晝夜董役」。史料の種類が異なるものの前掲 12) と同日の記録であるので、『輿地便覽』と『東国文献備考』は編集目的こそ近いものの、別の史料と考えられる。なお『輿地便覽』は韓国学中央研究院の蔵書閣と、東京の静嘉堂文庫に現存するが、後者は地方地図とその解説が中心をなし、前者は『山経表』と『道里表』からなっている。どちらも水原華城（1796 年竣工）が掲載されるなど、18 世紀末以降の状況が収録されているので、英祖が編纂を命じた原本ではないと考えられる。
- 14) 『輿地図書』では山名を羅列するのみではなく、各々の山がどの山と分水界でつながり、（風水の気を運ぶ）脈が来ているのかを明示した点で、「山経」につながる萌芽が見て取れる。

- 15) 『東国文献備考』 卷十二、輿地考七、山川条総説。
- 16) 『東国文献備考』 卷十二、輿地考七、山川条総説。
- 17) 「○○山経」は『東国文献備考』や『山水考』の十二宗山に準じて、筆者が便宜上命名したもの。「○○正脈」は『山経表』に記された正脈の名称。以下同じ。
- 18) 『続大典』 兵典駅路条。
- 19) 『山経表』や『道里表』は『東国文献備考』の山経と道路の部分で、朝鮮の伝統的な家系図である「族譜」の形式に配列しなおしたものだ。白頭大幹や大路を「本家」の系譜として筆頭に置き、正脈や支線道路が「分家」として枝分かれする形をとっている。18世紀後半に成立し、多くの写本や異本が伝わる。
- 20) 『箕封方域考』の場合。異本によりこうした記述がないこともある。
- 21) 風水の用語で、該当する地域において、主山と分水界でつながり、主山へ気を供給する山を指す。白頭山はさらに上位なので「宗祖山」となる。参考までに『東国文献備考』『山水考』では、俗離山経の漢南正脈の終点が果川県の冠岳山になっているが、冠岳山は首都漢陽において祖山（玄武）に対応する「朝山（朱雀）」であり、二つの山経で王都を挟んでいる。王都を重視する姿勢はここにも表れている。一方『山経表』では冠岳山は漢南正脈の岐脈に降格し、漢南正脈の終点は文殊山城（京畿道通津）になった。
- 22) 崔元碩「智異山と漢拏山における名山文化要素の歴史地理学的特徴の比較考察」、南冥學研究 42（韓国）、慶尚大学校南冥学研究所、2014、256-264頁。
- 23) Chan Seung Park「白頭山の民族霊山としての表象化」、東アジア文化研究 55（韓国）、漢陽大学校東アジア文化研究所、2013、11-15頁。
- 24) 『東国文献備考』 卷十二、輿地考七、山川条山経豆満江項。
- 25) 『山経表』には、大幹は白頭大幹のみで、十一の正脈が存在する（白頭山側から清北正脈、清南正脈、海西正脈、臨津北礼成南正脈、洛東正脈、漢北正脈、漢南正脈、錦北正脈、錦南正脈、湖南正脈、洛南正脈）。これらの名称からも、水経を基準に山経が設定されていることがわかる。これとは別に、豆満江に沿って白頭大幹とは逆方向へ向かう長白正幹なるものが存在する。これは白頭大幹の二股の分身といえる存在であるため、正脈とは別の呼称になっている。大幹と正幹は国土の脊梁であると同時に、正脈や岐脈と異なり邑治と直接接することがなく、「幹」に徹する点が特徴だ。
- 26) 現代の研究者は便宜上「岐脈」と呼称する。
- 27) 鴨緑江の中流、満浦と恵山の間には15世紀に設置された慈城・茂昌・閭延・虞芮の四郡を指す。しかし気候条件が厳しく、女真族の侵攻も度重なったので、同世紀中にすべて廃止され、領有放棄はしなかったものの無住地とされた。
- 28) 熊の韓国語名は「gom」で、錦の韓国音読である「geum」であることから、熊津が錦江の語源とされる。など熊津の別名は錦江津である。
- 29) 現在の蟾津江で、漢江水経の蟾江とは異なる。
- 30) 『東国文献備考』 卷十二、輿地考七、山川条山経蟾江項。
- 31) しばしば「巖」と表現される。
- 32) 『道里図標』（ソウル大学校奎章閣蔵）跋文「天覆地載、上天之星辰度数、下地之山川道里、脈絡相応（後略）」。

(立命館アジア太平洋大学教授)

Sugyeong or Traditional Geography on Korean Water System in Joseon's Nation-wide Imaginative Geography

by
Hiroshi Todoroki

In this paper, I have examined how rivers were positioned in geographic studies by Silhak scholars (Practitioners) during the Joseon Dynasty. I also conducted a comparative study with traditional geography of mountains and roads, which are important geographical elements other than rivers. In the middle of the 18th century, a geographer named Sin Gyeongjun became the center of such research.

Mountains are physical geography. Roads are human geography. But rivers have the character of both. These come together to create the framework of the land in parallel or intersect.

There are three characters on his traditional geographical thought. The first is the geopolitical aspect of clarifying the scope of the royal power and his special territory. The second is the ideological aspect of connecting nature and the humanities through the Feng Shui geography theory. The third is a practical aspect that is useful for actual travel or land use. The fusion of nature and humanities and the fusion of thought and practice are also characteristics of Korean traditional geography.

The geography of rivers did not spread unlike mountains and roads. Only Shin treated river as if it were a mountain from the viewpoint of geopolitics and imaginative geography. However, in terms of practicality, rivers were almost ignored.